

遺骨返還を願い叫び、世界平和を呼びかけ、全
国戦友会が無事盛会に終わった。

◎ 詫びて今 岸壁に立つ 生き残り

ナオトカへ 迎えに行かずば 帰れぬ戦友が^{とも}

満州哈達河開拓団の悲劇

「麻山」集団自決事件に思う

神奈川県 丸山 國武

昭和二十(一九四五)年八月十二日、旧満州の
東部国境に近い麻山において避難途上にあつた哈
達河^{タハ}開拓団の一団がソ連軍の包圍攻撃を受け、婦
女子四百数十人が自決するとゆう事件が起つた。
介錯は四十数人の男子団員により、小銃を用いて
行われた。男子団員はこの後ソ連軍陣地に斬り込
むことになつていたが果せず、間もなく終戦を迎
えこれら壮年男子の過半数は新京(長春)、ハルピ
ンへ逃れ、あるいはシベリアで收容されて、生き
て祖国の土を踏むことになつたのである。なぜ自
決したのか、新聞報道によれば刺殺とあり、また
は虐殺となつている。本当に自殺自決であつたの
か、なんで生きて、生きていなかつたのか、なん
でもっと生きようとしなかつたのか、人間の生と

死とは一体何なのか。麻山とは旧満州（現中国東北部）東安省林口県麻山という地名で虎林線に麻山駅もある。日ソ開戦直後の八月九日、東安省鶏寧県に入植していた哈達河開拓団（員）は、命により徹夜で牡丹江に向けて避難中、八月十二日麻山に達したとき、満州治安軍の反乱部隊が後方から襲来、前方にはソ連の戦車隊があり進退きまわる状況になった。

団長（貝沼洋二氏）は最悪の事態に陥ったと推定し、団員の壮年男子十数人と協議し婦女子を敵の手に渡り辱められるより自決をすすめ、同日男子十数人が約一時間に渡って婦女子に銃剣をふるい四百二十一人も刺殺した。男子団員は各地新京、ハルピン等へ逃亡し、あるいはシベリアで収容されて日本に帰還している。

当時（八月十二日）、私は関東軍第五軍隷下元第百二十六師団野砲兵連隊（通称部隊号英断旧満州第一五二五四部隊）の初年兵として麻山の戦闘に参加していた。その時の状況を知っているのは、

軍人としてはもう私一人ではなかるうか、だからこそこのことを今、書き残しておかなければならないと思うのである。

麻山の戦闘では同じ中隊の若い同年兵を始め、上官や古参兵の多くの戦死者を出している。

合 掌

ありし日の関東軍がその兵力約七十万を集結してソ満国境を威圧したのは、昭和十六年の盛夏、いわゆる「関東特演」当時がその頂点であった。既に知られているように「関東軍特別大演習」と称せられ、師団及び軍需資材を満州へ送還すべく極秘裏に、しかも大々的にこれが輸送訓練を行ったもので、最盛期における関東軍の威容については、今こういうまでもないが、その兵力実に二十個師団、航空機六百、戦車三百、軍需資材の集積量は内地在庫資材類の半数を移動するほどの大量（昭和十八年七月現在）を算し、これらの大軍と軍需品が満州の野に集結、あるいは集積されたのである。

これが大東亜戦争（太平洋戦争）の進展にともない、約十二個師団、それも精銳師団が選ばれて西南、南方、中部太平洋方面、沖縄及び本土防衛要員として、昭和十八年十月ごろから昭和二十年三月ごろまでにかけて抽出転用され、航空機も戦車も、これらの各方面へほとんど持つていかれてしまったのである。

關東軍がソ満国境守備線を著しく後退させる作戦を取らざるを得なかったと言われるのは、これらの軍の弱体化が原因であった。

昭和二十年に入つて、全滿にわたる守備線の後退が始まり、国境守備部隊は、一部兵力を残置して、移駐し始めるとともに、在滿在郷軍人及び一般邦人の現地召集を行い、部隊の編成改編を実施した。在滿兵力はその数二十四個師団を数うるに至つたが、実力なき大軍では、滿州全域を守備し得る自信は当時の大本營としても到底もつことができなかったであろう。

八月九日未明、ソ連軍による国境各方面からの

侵攻は意外の速さであつた。奇襲であつたことにもよるが、国境線は守備兵力少数でもあり、ソ連軍の機械化大部隊には抗し得るべくもなく突破され、各主要都市にも瞬く間にソ連軍が乗り込んできた。

私は昭和二十年三月十日、内地から派遣転属を命ぜられ、西東安、滴道の各隊の初年兵として教育、訓練、警備等に従事していたが、不幸にして病魔に犯され、林口陸軍病院滴道分院に入院した。入院中に日ソ開戦となり、八月十日未明、原隊に復帰し即日、滴道残留部隊、本部指導班行李の指揮下に入った。

当時滴道第一二六連隊の主力は滿州の東部国境に近い八面通大碾子山付近の陣地構築中であり、残りの滴道残留部隊は連隊長の命により、大碾子山の陣地より、火砲彈薬の受領に来ていた。三島政道中尉以下約八十人と病院から退院して来た者など合せて約四百六十人がいた。

私達は命により八月十日午後八時、本隊に向け

て滴道を出発し、蘭嶺、青龍を通過し十二日午前八時ころ運命の麻山地区部落に到着した。道路上を第一大隊、第二大隊、第三大隊と少し遅れて本部指揮班と行軍し、私は行李郡の最後尾であった。

昨夕からの大雨も天気となり、凹地付近で大休止となった。命により車に積んであった。酒保品（カンパン、缶詰等）を後方から付いてきた開拓団の女や子供らに配布分与していた。私はまさか後で全員自決した哈達河の開拓団とは知る由もなかった。私は兵科は輜重兵で訓練で慣れていたので、物品等を手際よく公平に配分中でした。突如として麻山駅方向より砲声があり、ソ連軍を発見し、直ちに応戦戦闘体制が開始された。

私は指揮班長の命を受け班長と共に伝令として行動し敵情視察と戦闘状況を中隊長に伝達報告する任務に当たった。しかしソ連戦車隊と自動小銃を携帯するソ連兵とでは、装備の少ない我が方では全く戦争にならない。

各大隊も野砲等で応戦したが、次々と破壊され

てしまった。雨あられのごとくの砲弾では脱出することも不可能であり、武器のない我々はどうすることもできなかった。

また運悪く、偶然最後尾の行李郡と先頭開拓団員の大休止の位置が凹地にあつたため逃げることもできず多数の犠牲者を出してしまった。今でも兵隊として軍人として、開拓団の老幼婦女子を助けることができなかつたことを申しわけなく思っている一人でもある。訓練を受けている兵隊でさえこの状況であり、開拓団員の状況は筆舌に尽くし難い悲惨なもようは今でも思い出されるのである。

撤退の声に後ろを見ることも出来ず、凹地の中から這い上がり、高粱畑の中から山中へ山中へと夢中で逃げに逃げて、気がついたら私一人になっていた。その後私は一人で逃避行を続けていたが、途中林口付近で指揮班長と偶然合流し、七星付近の戦闘にも参加し、各隊はバラバラになったが、私達小部隊一行（岩崎隊長以下十人）は北朝鮮付

近に向って南下して行ったが、悲しいかな鏡泊湖北部石頭甸子近辺でソ連兵に発見され武装解除を受け、徒步行軍で東京城を経て蘭嵐収容所に収容された。東京ダモイ（帰国）と騙されて全員シベリアに抑留された。

シベリアでは部隊はバラバラに編成され、私はいつも一人で別行動となり、復員するまで同じ部隊の者とは全く会う事はなかった。

シベリアではタイセツト地区の各収容所に収容され、強制労働に服しながら転々と移動した。私は栄養失調となり弱兵と指定され、いろいろな苦難と苦勞を重ねて、昭和二十三年九月ナホトカ港から高砂丸に乗船し生きて舞鶴港に上陸し復員できたのである。

「麻山事件」のことを知ったのは上官である戦友、当時の連隊本部の指揮班長でもあった上、恩人でもあった「岩崎真治曹長（故人）」から。

麻山脱出最後の手記に添えて

中村雪子著（草思社）

麻山事件「満州の野に婦女子四百余名自決す」という本を頂いたからである。

「麻山事件」を知り、なぜ生きられるだけ生きなかったのか、なぜ女たちは望んで死んでいったのか。できることなら本当の心を知りたい。今となつては神様だけが知っていて、永久に現在及び将来の人には絶対にはわからないであろう？ 戦争とは、勝つても負けても悲しいことである。昭和から平成となり戦争を知らない人が多くなつた。

戦後六十一年の年に当たり、このつたない手記を残すことにより、「麻山事件」で亡くなつた多くの人々に対してここに謹んでご冥福を祈るものである。

満州哈達河満蒙開拓団の悲劇『麻山集団自決事件』を思いながら……合掌

生年月日 大正十四（一九二五）年十月八日

本籍地 神奈川県 入営当時山梨県

現住所 神奈川県横浜市瀬谷区上瀬谷町

出生地	東京府荏原郡目黒町				三月二十八日	東安省鶏寧県滴道
昭和十五年三月二十五日	東京府東京市平塚			同日	六月十日	着 同地警備
尋常高等小学校	高等小学校修養年					第一二六師団野砲
限二カ年卒業	東京市荏原区小山				八月九日	連隊と改編編成完
自営業(運送店)	家事手伝い					結 ソ連対日宣戦布告
横須賀市元町	横須賀海軍工廠造船				八月十二日	ソ連軍東満国境各
部に徴用	現役兵として輜重				八月十六日	地より越境す
兵第五十七連隊補	充隊に入営				九月十七日	麻山の戦闘に参加
博多港出航	鮮満国境通過				同日	七星の戦闘に参加
移駐のため西東安	出発				九月二十二日	鏡泊湖西北部(通
						称サランチン)付
						近武装解除
						東京城収容所
						蘭嵐飛行場跡収容
						(所八遠溝作業隊
						第十六大隊第四中
						隊)

昭和三十二年一月一日	同病院で元旦	七月	第三回
三月二十日	同病院再入院（病名不詳）	九月	第四回
五月	第一回病院船高砂丸入港	九月十日	右高砂丸ナホトカ
六月頃	第二回	九月十一日	出港
同日	疾病（凍傷）申告	九月十二日	舞鶴港着
同日	し同地区から第一分所へ逆送	九月十三日	同港上陸
十二月一日	ナホトカ五九〇病院入院	九月十五日	復員式終了（復員証明書受領）
十二月二十五日	同病院退院	九月十六日	東舞鶴駅出發
同日	同病院勤務員（志願）		中央本線日下部駅（現山梨市駅）着、
	同病院勤務員（志願）		原籍地（山梨県東山梨郡八幡村市川）に帰還
	同病院再入院（病名不詳）		途中郷土氏神社に参詣